様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　４ 月 ２５ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３２９３

研究課題名（和文）国際共通語としての英語に対する態度と外国語学習に関する実証研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on the Attitudes Toward the Spread of English as a Global Language and Foreign Language Motivation

研究代表者
高橋　千佳（Takahashi, Chika）

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：３０７４９８３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、事実上の国際共通語として英語が機能する現状を学習者がどのように捉え、そのような現状が彼らの英語および第二外国語の学習動機づけにどのような影響を与えているのか、また、教育面ではどのような改善を目指せるのかを明らかにすることを目的とした。縦断的インタビューおよび質問紙調査から、学習者が概ね上記の現状を前向きに捉え、実利的理由から英語を学習していること、文化への興味、将来希望する職業との関連など、様々な動機づけに支えられて第二外国語を熱心に学習する者がいる一方、英語が国際共通語となっていることで第二外国語学習の動機づけを失い、必修の学習期間の終了とともにその学習も終える学習者も確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、国内における第二外国語あるいは複数言語の学習動機づけに関する研究の不足を補い、日本人学習者の外国語学習の動機づけの特徴を明らかにした。共通語という英語が存在する中でも、学習者によっては第二外国語にも学習の意味を見いだし、熱心に両方の言語を学習していること、また、授業が必修の期間を超えて、各々のやり方で英語や第二外国語の学習を継続する様子などが明らかになった一方、学習者によっては、第二外国語の授業に困難を覚えるにつれて、英語さえできればよいと考え始める学習者も存在することが明らかになった。これらを手がかりとして、今後の高等教育機関における第二外国語授業への示唆を提供した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine how learners perceive the spread of English as a global language and how such spread impacts learners' motivations to study both English and languages other than English (LOTEs). Through longitudinal interviews and questionnaires, the study indicated that some learners eagerly pursued their studies of LOTEs, which was supported by very specific and personalized reasons to study them,including interests in culture, its relationships to career aspirations, and ideal multilingual selves. On the other hand, some discontinued their studies of LOTEs after the end of the compulsory period due to the "English-is enough" attitudes they started to have as they experienced difficulties catching up with their LOTE courses.

研究分野：Second Language Acquisition

キーワード：国際共通語としての英語　外国語学習動機づけ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究を開始した頃、海外では英語以外の言語（language other than English, LOTE とする）の学習動機づけに関する研究の急増が見られる一方、国内では、LOTE 学習動機づけ、あるいは、LOTE と英語両方を同時に学習する場合の動機づけに関する研究の不足がみられた。海外における先行研究においては、英語が事実上の国際共通語となっていることから、LOTE の学習に意義を見出せず、その学習動機づけに対して英語が悪影響を与える例が多く報告されてきた（Henry, 2015 など）。また、そもそも、国内外において、英語が国際共通語になっているという現象に対して学習者がどのような態度を持っているかについては明らかになっていない点が多かった。英語が国際共通語として機能していることは世の中で広く認知されているが，そのような現象に対する学習者の態度を直接的に測る尺度は開発されていない状況であった。近い概念としては，例えば「国際的志向性」(Yashima, 2002)があるが，これは，学習者が漠然と「国際的なもの」（例えば，国際的なニュースやキャリアなど）と考えていることに対する興味の有無を測る概念であり，国際共通語としての英語，つまり言語の機能自体に対する認知を測るものではない。また，学習動機づけの分野における先行研究では，外国語学習に対する興味や英語の手段性を測る尺度は存在する(Ryan, 2009 など)が，いずれも国際共通語という側面を踏まえたものではなかった。しかし，国際共通語としての英語の広まりに対する態度は，英語学習のみならず LOTE 学習にも大きく影響することが先行研究からも明らかになっており，このような尺度を開発することは，今後の英語学習動機づけ研究，LOTE 学習動機づけ研究，さらに，国際共通語としての英語を使った異文化接触について研究する異文化コミュニケーション論などでも応用できる尺度になりえた。

学習者の態度や心理を測る際、実証研究で多く利用されるのがリッカート尺度項目の質問紙である。このような尺度を開発する際、応用言語学の分野ではその利用があまり進んでいないが、項目応答理論を利用した分析を行うことで、質問紙項目の 1 つ 1 つを精査することが可能である。1 つ 1 つの質問紙項目を検証することで、それらの項目の集合であるある尺度についても多くの研究で利用できる状態になる。今回、国際共通語としての英語の広まりに対する態度についても項目応答理論を使って尺度の開発が行えれば、第二言語習得や異文化コミュニケーションなど、複数の分野でその利用が可能になると考えた。

一方、LOTE を含む外国語学習の動機づけについては、学習者がおかれた環境によってその動機づけも様々に変化することが予想された。これまでの先行研究は、主としてヨーロッパやアメリカ、中国など一部の国に偏っており、普段、LOTE、英語ともにあまり触れる機会がない日本人学習者については、先行研究の結果がそのまま当てはまるとは考えづらく、その詳細を調査する必要があると考えた。

２．研究の目的

以上のような背景から、本研究では，英語および LOTE を学ぶ大学生を対象として，国際共通語としての英語の広まりに対する態度が英語および LOTE 学習に与える影響を明らかにし，今後の指導法を学習動機づけ面に着目して探ることを目的とした。具体的には、上記の態度を測る尺度を開発し、国際共通語としての英語の広まりに対する態度と外国語学習動機づけとの関連を明らかにすること、さらに、複数回の縦断的インタビュー調査により、必修科目として英語および LOTE を学ぶ学習者の、必修期間中およびその後の動機づけの変化を明らかにしようとした。これらを明らかにすることで、本研究では、学習動機づけの分野において新しい視座を提供し、今後の教育における改善方法を探ることを目指した。

３．研究の方法

本研究では、質問紙調査を通じて、国際共通語としての英語の広まりに対する態度を測る尺度を開発し、英語および L0TE 学習の関連を調査するとともに、4 回の縦断的インタビュー調査を行った。まず質問紙調査については、上記の態度に関する 3 側面（英語の広がりに対する前向きな態度、国際共通語としての英語の実利的側面、異文化間コミュニケーションの道具としての国際共通語）に着目し、それぞれについて複数のリッカート尺度項目を作成、これらを含む質問紙を実施した。データは、探索的および確認的因子分析によりその 3 側面を確認するとともに、項目応答理論の中の段階反応モデル（Samejima, 1969）を利用してそれぞれの質問紙項目の詳細を分析し、英語学習や L0TE 学習との関連を調査した。さらに、質問紙には自由記述項目も含むことで、リッカート尺度項目の結果と比較対照ができるようにした。

一方、縦断的インタビュー調査では、必修科目として英語および L0TE を学ぶ大学 1 回生時から、必修期間を終えた 2 回生時にかけて、計 4 回のインタビューを 12 名を対象として行った。これにより、必修期間中・必修期間後の動機づけの変化を探るとともに、学習動機づけに対する英語の影響の有無や学習の実態、学習者の将来への展望などを明らかにした。

４．研究成果

本研究の主たる成果は、国際共通語としての英語の広まりに対する態度を測る尺度を開発し、それを使って、学習者がこのような現象を概ね前向きに捉えつつも、必ずしもそのことが LOTE 学習動機づけに悪影響は与えていないことを実証的に確認したこと、また、日本のような環境にあっても、英語、LOTE ともに熱心に学習を続け、複数の言語学習を続ける学習者の詳細を明らかにしたことである。先行研究においては、英語の広まりから LOTE 学習に前向きに取り組めず、途中で学習をやめてしまう例も報告されているが、英語、LOTE、いずれにも日常的に触れる機会が少ない日本人学習者にとっては、却って両者の習熟度の違いがそこまで顕著にならず、英語の悪影響を避けられた例もみられることが明らかになった。

まず、質問紙調査からは、項目によって、異なる態度の学習者をよりはっきりと識別できるものとそうでないものが存在することが明らかになり、尺度の開発ができた。例えば、ある項目では、異なる態度の学習者が異なる選択肢（１＝「全くそうではない」と６＝「全くその通り」など）を選ぶ可能性が高い一方、他の項目では、どのような態度であっても「６＝全くその通り」で答える可能性が最も高く、項目として不適切なものも存在することが明らかになった。よって、今後の研究においては、項目としてより適切に機能しているもののみ残した尺度で調査を行うことが望ましいことが明らかになった。

また、適切に機能している項目のみ残し、それらを使って測った「国際共通語としての英語の広まりに対する態度」の変数と、英語の学習意欲および LOTE 学習に対する態度の相関を分析したところ、①上記の態度の 3 要素の中で、英語の学習意欲と最も相関係数が高いのは「国際共通語としての英語の実利的側面」であること、②LOTE 学習に対する態度と 3 要素の相関はいずれも非常に低く、英語が国際的に広まっていることと LOTE 学習に対する態度に関係がないことが確認された。このことは、先行研究とは違い、英語が LOTE 学習動機づけに悪影響を与えていないことを示唆している。

次に、インタビュー調査では、1 年間の必修の英語・LOTE 学習期間後およびその後の動機づけの変化を半構造化インタビューにより明らかにした。これにより、学習開始当初は、多くのインタビュー協力者が「LOTE 学習が必修であること」を前向きに捉えていることが確認された一方、特に 2 学期目に入ると、学習に困難を感じ、授業についていくのが難しくなる学習者もおり、このような学習者は必修期間の終了とともに LOTE 学習を終了していたことが明らかになった。このような学習者の場合、学習開始当初は英語の LOTE 学習動機づけへの悪影響がなかった一方、LOTE 学習が困難になるにつれて、「英語さえできればよい」という考え方に変化していくことが確認された。また、必修期間後も学習の継続を希望する一方、どのように自習してよいかわからないという学習者も複数いることが確認された。

一方、インタビュー協力者の中には、LOTE 学習に熱心なあまり、英語学習に悪影響があるという、いわば先行研究とは逆のパターンの学習者も存在した。ただ、この学習者については、LOTE 学習を熱心に続けるにつれて、毎日学習して「学習を習慣化すること」に成功し、そのことで自信を得る結果となり、英語学習にも後に熱心に学習を行うという変化が明らかになった。必修期間後、この学習者については両方の言語の学習を継続し、「多言語話者になりたい」と希望する“ideal multilingual self”（多言語理想自己、Henry, 2017）の発展がみられた。また、別の協力者については、必修期間後、選択授業を履修する形ではないものの、文学やネット上の情報を「原語で読む」という行為を通じて、英語、LOTE 学習が継続していた。この学習者によれば、先行研究の対象者であったヨーロッパの学習者などと違い、日本人学習者の多くは英語・LOTE の習熟度にはそこまで違いがなく、そのことで英語の LOTE 学習動機づけへの悪影響を避けられるのではないかとのことであった。

以上のような質問紙およびインタビュー調査結果から、学習者の多くは国際共通語としての英語の広まりを前向きに捉える一方、学習者の状況により、英語の LOTE 学習動機づけへの影響は様々であることが明らかになった。このことは、ヨーロッパなど海外における先行研究の結果とは異なる結果が国内ではみられることを示しており、学習者がおかれた環境を十分に考慮した上での議論の必要性が指摘できる。また、LOTE 学習開始当初は熱心であっても、授業についていきづらくなると「英語のみできればよい」と考え始める学習者も存在したことから、大学の LOTE 授業においては、授業の進度をどれくらいにするか、どのように復習を組み込むか、さらに、必修期間後の自習にどのように橋渡ししていくかなどを吟味する必要があることが明らかになった。これらの結果から、今後は、英語が事実上の国際共通語となっている中での、高等教育機関における必修の LOTE 授業の意味についてのさらなる議論、複数の言語を同時に学習する際の動機づけのさらなる調査を目指していきたい。

＜引用文献＞

①Henry, A. (2015). The dynamics of L3 motivation: A longitudinal interview/observation-based study. In Z. Dörnyei, P.D. MacIntyre, & A. Henry (Eds.), *Motivational dynamics in language learning* (pp. 315-342). Multilingual Matters.

②Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal, 86*, 54-66.

③Ryan, S. (2009). Self and identity in L2 motivation in Japan: The ideal L2 self and Japanese learners of English. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 120-143). Multilingual Matters.
④Samejima, F. (1969). Estimation of latent ability using a response pattern of graded scores. *Psychometrika Monograph, No. 17*. doi: 10.1007/BF03372160
⑤Henry, A. (2017). L2 motivation and multilingual identities. *The Modern Language Journal, 101*, 548-565.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Takahashi, Chika	４．巻 51
２．論文標題 The Influence of Global English on Language Learners: Beyond the Instrumentalist View of Language Learning	５．発行年 2021年
３．雑誌名 愛媛大学法文学部論集人文学編	６．最初と最後の頁 97-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高橋千佳	４．巻 53
２．論文標題 複数言語を学習する動機づけの予備的分析―英語の広がりに対する態度に着目して―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 愛媛大学法文学部論集人文学編	６．最初と最後の頁 113-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takahashi, Chika & Im, Seongah	４．巻 -
２．論文標題 Attitudes Toward the Spread of English and Language Learning Motivation: A Graded Response Model Analysis	５．発行年 2023年
３．雑誌名 International Journal of Applied Linguistics	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ijal.12457	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Takahashi, Chika
２．発表標題 LOTE Education in a Non-Multilingual Context: Japanese Learners' Attitudes toward Global English and Their Relationships to English and LOTE Motivations
３．学会等名 A Symposium on "Multilingualism, Culture-Language Maintenance and Education in Asia and the Pacific"（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Takahashi, Chika
２．発表標題 Examining Changes in LOTE Motivations and Interactions with English
３．学会等名 全国語学教育学会第48回年次国際大会教材展示会（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Takahashi, Chika	４．発行年 2024年
２．出版社 Multilingual Matters	５．総ページ数 -
３．書名 Multilingual Selves and Motivations for Learning Languages Other Than English in Asian Contexts	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関